

# 第二十願の分位

稻葉秀賢

第二十願は『教行信證』「化卷」に於いて、

至心回向之願 不定聚機 難思往生  
阿彌陀經之意也

と標擧せられ、第十九願至心發願之願と共に方便之願とせられている。凡そ『教行信證』に於ける三々之法門と云われる眞假批判の體系は、宗祖己證の體驗に基くもので、それが『教行信證』成立の基盤をなすことは、今更云うまでもない。而して三々の法門に於ける眞假三願にあつて、特に問題となり、深い意味を持つているのが二十願である。何故ならば、三願の眞假を論ずる場合に要門を明す第十九願の地位は、既に善導元祖に於ける要弘廢立の精神に依て明瞭にせられているに對し、宗祖の己證に基く第二十願眞門の開顯が、如何なる意味を持つ

かということこそ、宗祖教學の根本的性格に繋がる課題だからである。ここに我々は第二十願の分位を明かにすることに於いて、宗祖教學の核心の問題に觸れてゆきたいと思う。

宗祖は元祖との遭遇に依る獲信の喜びを、後序に極めて感激的な言葉で

「然愚禿釋鸞建仁辛酉曆、棄<sub>ニ</sub>雜行<sub>一</sub>兮歸<sub>ニ</sub>本願<sub>一</sub>」

と記すと共に『選擇集』付屬と眞影の圖畫に依る知遇の程を書きしるしていられる。この文に於いて常に注意せられるのは、「雜行を棄てて本願に歸す」といわれたことである。雜行は勿論正行に對する言葉であるから、「雜行を棄てて」と云えば、當然「正行に歸す」と云わねばならぬ筈である。然るに宗祖が敢て、「本願に歸す」といわれたのは、宗祖の己證ではなくて、寧ろ元祖相承

である。この場合、宗祖がいわんとするところは、「よき人のおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なし」といわれた境地に於いて、元祖的傳の眞宗の正意を示さんとするのであるから、この表現が全く元祖相承であることは否定し得ないであらう。

凡そ元祖教學は、『選擇集』に往生之業念佛爲本と標せられたことから、その特質が念佛爲本という點に置かれ、宗祖教學の特質が信心爲本とあらわされるのと、宛も對照的に理解せられ易い。それ故に、「いくたびも廢立をさきとせられた」眞宗に於いて、宗祖は念佛爲本を廢して、信心爲本を立てられたと、念佛爲本と信心爲本との間に、廢立を立てる如き奇怪な説をさえ産むに到つた。けれども、かくの如き理解は元祖を誤ると共に宗祖を誤るものであつて、信心爲本でない念佛爲本もなければ、念佛爲本でない信心爲本もある筈がない。既に『選擇集』二行章にあつて、元祖は、

「問曰何故五種之中獨以稱名念佛爲正定業乎。答曰願<sub>レ</sub>彼佛願<sub>レ</sub>故。意云、稱名念佛は彼佛本願行也、故修<sub>レ</sub>之者乘<sub>レ</sub>彼佛願<sub>レ</sub>必得<sub>レ</sub>往生也」

といつていられる。若し元祖が念佛爲本であつて信心爲本でないとするならば、恐らくは、「彼の佛願に乘じ

て必ず往生を得る也」とはいわれないで、「彼の佛名を稱するが故に往生を得る也」といわれねばならぬ筈である。然るに念佛爲本稱名正定業を「乘彼佛願」で受けられたのであつて、それは明かに信心爲本である。彼の佛願に乘ずる信心に依てのみ、始めて往生を得るからである。

かくて要弘廢立の元祖教學に於いて、信心爲本の義は明瞭にせられたのである。何故に宗祖は第二十願の眞門を聞いて、方便の願意を明かにせねばならなかつたのであろうか。ここに宗祖已證の體驗たる三願轉入を顧みること<sub>レ</sub>に於いて、第二十願眞門が宗祖の體驗に於いて、如何に深い意味を持つかを明かにせねばならない。

## 二

宗祖は「化卷」に於いて、十九願開説の『觀無量壽經』の意と二十願開説の『阿彌陀經』の意とを述べ、この二願が却て眞實なる選擇の願海に歸せしめるものであることを自らの體驗に即して記述せられた。それが所謂三願轉入の文である。即ち、

「是以愚禿釋鸞仰論主解義依宗師勸化、久出萬行諸善之假門、永離雙樹林下之往生、回入善本德本眞

門「偏發ニ難思往生之心」然今特出ニ方便眞門「轉ニ入選  
擇願海ニ速離ニ難思往生心」欲レ遂ニ難思議往生、果遂之  
誓良有レ由哉」

といつて、それが論主の解義と宗師の勸化に依ると告  
白せられている。ここに論主と云い、宗師と云われたの  
に就いて、古來種々に論義せられるところであるが、一  
應ここでは論主を天親菩薩、宗師を善導大師と定めてお  
きたい。尤も論主という場合、論主は天親であることは  
勿論であるが、宗祖が「天親菩薩のみことをも、鸞師と  
きのべたまはずば、他力廣大威徳の、心行いかでかさ  
らまし」と述べられた意趣から、論主天親の中に曇鸞を  
含むことは當然である。又宗師は善導を意味しつつ元祖  
を含むことは、元祖が「偏依善導一師」といい、善導の  
教學を忠實に繼承しつつ寧ろそれを純粹に發展せしめた  
ことに於いて、否むことができない。それ故に、一應論  
主を天親、宗師を善導と決定していいであらう。

加之、『教行信證』一部を形成する眞假批判の軸をな  
すものは信の如實不如實である。即ち方便の願として  
「化卷」に標擧せられた第十九、第二十の二願は、それ  
ぞれに至心發願之願、至心回向之願と呼ばれ、それは明  
かに「信卷」に標擧せられた第十八願至心信樂之願に對

するものである。從て信樂と發願と回向という信の如實  
不如實を明かにするものが眞假批判の中心である、凡そ  
『教行信證』の撰述意趣について考える場合に、宗祖が  
元祖の『選擇集』以上に何物かを加えようとせられたと  
いうことは、如何にしても考えることができない。何故  
ならば、宗祖にとつて淨土眞宗を開顯したものは元祖に  
外ならぬというのが宗祖の堅い信念だからである。即ち  
『教行信證』の後序には、

「眞宗興隆太祖源空法師」

と云い、『正信偈』には、

「眞宗教證興片州」

と説き、更に『和讃』には、

「智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞  
宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ」

と嘆じ、『歎異鈔』にも、

「親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられま  
いらすべしとよき人のおほせをかうふりて、信ずるほ  
かに別の仔細なきなり」

と記されていることから見ても、宗祖が元祖を超えよ  
うとするような意志を持たれたのではなく、却て元祖の  
眞意を純粹に、開顯せられたに過ぎないのである。從て

「行卷」は、こうした元祖教學の純粹な相承といわれ、「行卷」のみに『選擇集』の題號、標宗の文、總結の文が引用せられ、それに依て『選擇集』全體を引用する意趣を示されたとするは、古來常に注意せられて來たところである。そしてこの元祖の『選擇集』を受けて

「明知是非凡聖自力之行、故名不回向之行也、大聖人重輕惡人皆同齊應歸選擇大寶海念佛成佛」と

と結び、念佛の不行が他力回向の行であることを明かにせられた。これは元祖が念佛を本願之行と示された意を明かにせられたものである。蓋し元祖の場合には、念佛が本願の行であり、それ故に本願を信じて往生を得ることを明かにせられたけれども、それが他力回向の行であるという明確な規定は、未だ明瞭には看取せられないようである。従て念佛を修する場合の能修の心について、眞假の批判をせられることはなかつた。寧ろ善導を如實に繼承せられた元祖の立場では、所謂要弘廢立で、雜行を捨てて正行に歸し、助業を傍にして正定業を専らにする念佛爲本の義を明かにするのが中心であつた。然るに宗祖に到れば、要弘廢立の立場は善導元祖に依て既に明かにせられたのであつて、その要弘廢立の意を徹底せしめるとき、そこに能修の心の如實不如實が問

題となるのであつて、ここに宗祖の己證があり、この己證を展開したものが「信卷」を中心とする信の如實不如實であつた。それ故に「化卷」には方便の願として第十九、第二十の二願が擧げられているけれども、そこで批判せられるのは行の如實不如實よりは信の如實不如實なのである。即ち第十九願をあげられたのは雜修雜心の批判であるし、第二十願を擧げられたのは專修雜心の批判であつて、眞假批判の焦點は、第十九願にあつても、第二十願にあつても、ひとへに雜心の批判にあつたのである。それ故に第十九願は雜修雜心の批判であるから、雜修は雜行を修するもの、非本願の行たる修諸功德の諸行を修するものとして、行の批判も勿論含まれているけれども、眞假批判の精神から云へば、かくの如き非本願の行たる諸行に囚われた雜心こそが問題なのである。されば雜修雜心が不如實の信であることは勿論であるが、專修念佛のものに雜心のものありと、ここに眞門第二十願の意が明かにせられたのであつて、殊に第二十願を課題とせられた所に宗祖の己證があつたのである。宗祖が善導元祖を受けて雜行即雜修を示すと共に、「助正ならべて修するをば、すなはち雜修となづけ」られ、「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修とな

づけ」られたのは、宗祖が厳しい雑心の批判をせられたからである。かうした信の如實不如實を問題として、他力回向の信こそ如實の信であることを明かにせられたのが「信卷」であるが、そのことを明かにする中核となつたのが實に論主と宗師であつた。

かくて他力回向の信を明かにせられた「信卷」の三一問答は前番の問答に於いて論主の解義を受けて、

「愚鈍衆生解了爲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>易、彌陀如來雖<sub>レ</sub>發<sub>三</sub>三心<sub>二</sub>涅槃眞因唯以<sub>三</sub>信心<sub>一</sub>、是故論主合<sub>三</sub>三爲<sub>一</sub>一歎<sub>一</sub>」

と云い、又後番の問答では宗師の勸化を受けて、至心・信樂・欲生の三心が全く他力回向の心であることを明かにせられたのであつた。それ故に三一問答の展開する前衛として『論註』に依て一心の純一性を三不三信であらわし、又善導の三心釋を引用して、殊に如實の信が他力の信でなければならぬことを明かにしたのであつた。かくて「化卷」にあつて、不如實の信を明された第十九第二十の二願にあつて、特に問題になるのは、他力回向の信に對して定散自力の心であり、しかもその定散の自心は定散の行にのみあるものではなく、却て專修念佛にも執拗にからみつくものである。ここに宗祖の深い課題があり、從て第二十願の分位が問題とならざるを得

ない。

### 三

惠信尼消息に記されている寛喜の夢想において、宗祖はかつて三部經千部讀誦を思いたつた自力の執心が、建保二年から寛喜三年まで、實に十七、八年たつても失せ去らないことを歎いて、

「人の執心自力の心はよくく思慮あるべし」

と云つていられる。蓋し、拂つても拂つても執拗につきまうのは、まことに自力の執心である。然しその自力の執心に悔責の心が生ずるのは、その自力の執心を内からつき破る願力に働かれているからであつて、こうした悔責の中にこそ、いよいよ深く本願が仰がれたのである。宗祖が正嘉二年八十六歳にして撰述せられた『正像末和讃』に、疑惑罪過和讃二十二首を製作せられた精神もまたここにあると云わねばならない。そしてそこで最も問題となるのが專修雑心の批判としての第二十願である。

宗祖が自分の體驗に基いて記述せられた三願轉入の文に依れば、

「是以愚禿釋鸞仰<sub>三</sub>論主解義<sub>一</sub>・依<sub>三</sub>宗師勸化<sub>一</sub>、久出<sub>三</sub>萬行

諸善之假門、永離<sub>二</sub>雙樹林下之往生<sub>一</sub>、回<sub>二</sub>入善本德本眞門<sub>一</sub>、偏發<sub>二</sub>難思往生之心<sub>一</sub>、然<sub>今</sub>特出<sub>二</sub>方便眞門<sub>一</sub>、轉<sub>二</sub>入選擇願海<sub>一</sub>、速<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>難思往生心<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>難思議往生<sub>一</sub>、果遂之誓良有<sub>レ</sub>由哉」

とあつて、萬行諸善之假門を出ずること久しく、永久に雙樹林下往生を離れたといわれたのは、まさに雜行を捨てて正行に歸する姿を述べられたものであるに違いない。然るに正行に歸しはしたものの、善本徳本の眞門に回入して不了佛智の過失から脱出することができなかった。誠に罪福信に基く不了佛智の過失が善本徳本の眞門に低迷させるのであつて、そこに、

「悲哉垢障凡愚自<sub>二</sub>從無際<sub>一</sub>己來、助正間雜定散心雜故出離無<sub>二</sub>其期<sub>一</sub>、自度<sub>二</sub>流轉輪廻<sub>一</sub>、超<sub>二</sub>過微塵劫<sub>一</sub>、歸<sub>二</sub>佛願力<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>大信海<sub>一</sub>、良可<sub>レ</sub>傷嗟、可<sub>レ</sub>悲歎」

という痛切な悲歎が生れるのである。この悲歎が或は和讃としては疑惑罪過和讃が作られたこととなるのである。然るにこの悲歎の中に、今特に方便の眞門を出て選擇の願海に轉入し、速かに難思往生の心を離れて難思議往生を離れんと欲うということは、助正間雜し定散心雜るが故に出離その期なく、佛願力に歸し難く大信海に入り難い傷嗟や悲歎が雲散霧消することであろうか。ここ

に方便眞門の願たる第二十願が選擇の願海をあらわす第十八願に對し、如何なる關係に立つかが重要な課題となるのである。

凡そ三願轉入の記述が宗祖の信仰體驗に基くことは否むことはできないにしても、それを時間的にまた外面的にあらわれた宗祖の生活記録と見ることは、恐らく三願轉入の記述を領解する正しい方法ではないであろう。勿論宗祖は吉水入室の體驗を、

「然愚禿釋鸞建仁辛酉曆、棄<sub>二</sub>雜行<sub>一</sub>、今歸<sub>二</sub>本願<sub>一</sub>」

と明確に記述していられる。從て三願轉入の記述も何年かが眞門、何年かが弘願轉入と云い得るが如く考えられないでもない。事實そうした試みを敢てした學者もあつた。然しそれは恐らくは信仰體驗の事實を誤るものと云わねばならない。何故ならば、獲信の事實といつても、それは物理的時間として規定せられる如きものではなく、最も具體的な自覺的時間でなければならぬからである。古來一念を假時を以て理解せられて來たのも、或は一念の信が不覺の覺と云われて來たのもそれが自覺的時間であることを示すものである。それ故に、建仁辛酉曆といつても、それは元祖との遭遇を示す年時の標識であつて、物理的に何年何月何日ということをあらわす

ものではない。元祖との遭遇に依て「兼<sub>ニ</sub>雜行<sub>一</sub>兮歸<sub>ニ</sub>本願<sub>一</sub>」ということを書べられたのである。従て「今特に」といつても、それは今更に『教行信證』撰述の今と規定するを要しないのであつて、「雜行を棄てて本願に歸す」という自覺は、常に今として、宗祖の生涯を貫くものであつたに違いない。それ故に三願轉入の記述も、それは建仁辛酉曆の體驗に發した、宗祖獲信の自覺内容に於ける歡喜であつて、雜行を棄て本願に歸した體驗に即して、そこに深い如來の善巧を仰がれたのが、三願轉入の記述なのである。さればこそ、

「爰久入<sub>ニ</sub>願海<sub>一</sub>、深知<sub>ニ</sub>佛恩<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>報<sub>ニ</sub>謝<sub>ニ</sub>至德<sub>一</sub>、據<sub>ニ</sub>眞宗簡要<sub>一</sub>、恆常稱<sub>ニ</sub>念<sub>ニ</sub>不可思議德海<sub>一</sub>、彌喜<sub>ニ</sub>愛斯<sub>一</sub>、特頂<sub>ニ</sub>戴斯<sub>一</sub>也」

といわれたのであつて、ここに久しく願海に入つてといわれたのは、それが直接的には吉水に於ける入信の事實を、また間接には微塵劫に亙る如來の善巧の久しきを物語るものであつて、そこに深く佛恩を知られたのである。然もかくの如く深く佛恩を知ることとは、無媒介にそれが出てくるのではなくて、久しく萬行諸善の假門は出て、善本徳本眞門に低迷し、そこに限りなく傷嗟と悲歎とがあつたのであるが、この微塵劫を超過すれども佛願力に歸し巨く、大信海に入り巨しという悲歎と

懺悔を契機として、今特に選擇の願海に轉入せることを喜ばれたのである。夫故に選擇の願海に轉入したという點から云えば、最早善本徳本の眞門に低迷しているのではないけれども、しかも常に善本徳本の眞門が選擇の願海の背面にあつて、喜愛頂戴の歡喜を深めているのである。

ここに第二十願に於ける定散自力の心が第十八願弘願の信心に轉入せしめる内面的契機をなすことが明かである。それ故に第二十願は常に第十八願に即して轉入の自覺を鮮かならしめる地位にあるのであつて、このことを我々は「化卷」に於ける第二十願開説の所明の上にたしかめてみねばならない。

#### 四

「化卷」方便眞門を明すに就いて、特に第二十願意を説くのは、

「夫濁世道俗應<sub>レ</sub>速入<sub>ニ</sub>圓修至徳眞門<sub>一</sub>願<sub>ニ</sub>難思往生<sub>上</sub>」

(御自釋五〇)

からであるが、特に眞門の相を明すに就いて眞門の法義を述べ、更に

「然則釋迦牟尼佛開<sub>ニ</sub>演功德藏<sub>一</sub>、勸<sub>ニ</sub>化十方濁世<sub>一</sub>、阿彌

陀如來本發<sub>三</sub>果遂之誓<sub>三</sub>願也<sub>二十</sub>悲引諸有群生海、既而有<sub>三</sub>悲願<sub>一名</sub>植諸德本之願<sub>一</sub>、復名<sub>二</sub>係念定生之願<sub>一</sub>、復名<sub>三</sub>不可遂者之願<sub>一</sub>、亦可<sub>レ</sub>名<sub>三</sub>至心回向之願<sub>一</sub>也<sub>一</sub>」

といつて、眞門の教興を明し、それを證明する爲に二十八文が引證せられている。この中、『大經』二十願文から孤山智圓の彌陀經疏に至る十八文はまさに方便の眞門を證明する爲であり、後の十文は『小經』隱顯の實義たる難信の義を擧げて、偏えに勸信の爲に引用せられているが如くである。從て第二十願の分位を定めるに就いて、特に重要な意義を持つのは後の十文である。何故ならば、此等の文は專修雜心の離れ難きを示して、如實の信を勧められるのであり、それに依て專修雜心という機失の深さの故にいよいよ大悲の善巧が仰がれると共に、第二十願の占める分位が確められるからである。

此等の十文の中、前の六文は經文であり、後の四文は釋文である。その經文の中、初の『大經』流通の文は正顯であり、後の『涅槃經』の三文と『華嚴經』の二文とは助顯である。又釋文の中、『般舟讚』の文は總じて明し、『禮讚』、『法事讚』の文は別明である。いまこれらの引文の精神に觸れることに依て、第二十願の分位を明かにしたいと思うのである。

かくて第一に注意せられねばならぬのは、『大經』流通の文であつて、ここには值佛の難、聞法の難、修行の難、獲信の難が説かれ、宗祖はこの文に深い感銘を受けられたものの如く、『淨土和讚』には

「如來の興世にあひがたく、諸佛の經道ききがたし、菩薩の勝法きくことも、無量劫にもまれらなり、善知識にあふことも、おしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたし」

と詠歎して、流通の文に依りつつ、值佛世の難、聞一乘の難、遇善知識の難、善教授の難、善領解の難を擧げ更に續いて、

「一代諸教の信よりも、弘願の信樂なをかたし、難中之難とときたまひ、無過此難とのべたまふ」

と歎じて別途不共の獲信の難を擧げていられる。值佛聞法等の難もさることながら、弘願の信樂を獲ることこそ、難中之難無過此難であつて、それは『小經』の極難信の經説に應じつつ、如何にしても離れ難い不了佛智の過失の深さを歎ぜられたものであるに違いない。そしてそこから下の私釋の結勸に出ずる專修雜心の過失をわが身に即して悲傷せられたのである。まことに專修雜心の傷嗟すべく、悲歎すべきは、助正間難し、定散心雜わる



不信の姿に外ならぬのである。故に「應當信順如法修行」の如實信を勧められるのが、この『大經』流通の文の引用意趣である。

次に『涅槃經』の三文と『華嚴經』の二文とが引用せられるのであるが、此等の文はさきの『大經』の文に對する助顯である。『涅槃經』の三文の中、第一の迦葉品の文は（北本三五—正藏一二・五七三）梵行の因として善知識を擧げ、惡行の因として邪見を擧げ、阿耨多羅三藐三菩提の因として信心を擧げている。蓋しここに惡行の因として邪見を擧げるのは、『小經』の濁惡邪見の衆生に對し、阿耨菩提の因として信心を擧げるのは、既にその經説が「信卷」（六要會本四三七）にも引用せられていることから見て、佛智疑惑のものにひたすら弘願の信心を勧められたものであつて、『大經』流通の勸信を助顯するものであるといつていい。また『涅槃經』の次の文に對すれば、信不具足を明す文に應じて、信心を勧めると共に、次の徳王品（北本二五—正藏一二・五一）に善知識の徳を讚ずるに對して、梵行の因は善知識であることを示したのである。従て最初の迦葉品の文は後の二文に對して、總じて明すのであり、後の二文は別顯である。

後の二文の中、初の文（北本三六一—正藏一二・五七五）は

信不具足の文、戒不具足の文、聞不具足の文を擧げ、以て不了佛智の人を誡めるのであるが、殊に四の善事有つて惡果を獲得せんと云つて、一勝他の爲の故に經典を讀誦す、二利養の爲の故に禁戒を受持す、三他屬の爲の故に布施を行ぜず、四非想非々想處の爲の故に繫念思惟すと云い、又聞不具足に就いて、論議の爲の故に、勝他の爲の故に、利養の爲の故に、諸有の爲の故に、持讀誦說するものは聞不具足であるといつているのは、後の專修雜心の四失に對應するものであつて、これに依て專修雜心の過失を誡めると共に、愈佛願難思の信樂を勧めるのである。

次の徳王品の文は、眞實の善知識は菩薩諸佛世尊なりと云い、諸佛菩薩は善く調御するが故に善知識と名づけ、又大醫なるが故に、良醫なるが故に、船師の如く人を度するが故に善知識と名づけると善知識の徳を讚えている。これは明かに善知識に依て弘願の信に入るべきことを勧めたものであつて、後の專修雜心の失に同行善知識に親近せずとあるのに照應せんとするのである。

次に『華嚴經』の二文の中、初の文は入法界品の文（唐譯七七—正藏一〇・四二五）であつて、總じて善知識の徳を擧げて、自力稱名の人は、徒らに人我を募り、善知

識に近づかぬことを誡めたものである。次の文は同じく入法界品の文(唐譯六〇—正藏一〇・三二六)であつて、この文は特に佛恩の深きことを歎じて、「如來無數劫に勤苦せしことは衆生の爲なり」と云い、この師恩に報ずべきことを説くことに依て、佛恩を念報する心なき専修雑心の徒を誡められたのである。かくてこれらの經文は専修雑心の四失に照應しつつ、これらの過失を誡めて、偏に弘願の信に歸すべきことを説くのである。そして特に注意せられることは、『涅槃經』『華嚴經』を通して善知識の恩徳が讃えられ、善知識の教に従て弘願の信心に歸すべきことを教えられた點である。

思うに善知識は『涅槃經』に依れば所謂菩薩諸佛であるが、最も直接的には釋尊を指すであらう。然し宗祖にあつては、「化卷」(六要會本九三<sup>左</sup>)に引用せられた就人立信の文に、一切凡夫に勧めて諸佛が同讚同勸せられ、又釋尊が五濁惡時惡世界惡衆生惡煩惱惡邪無信の盛なる時に、彌陀の名號を稱念すべきことを勧められたのも、衆生が釋迦一佛の所説を信ぜざることを恐れてであることが憶念せられていたであらう。誠に一切凡夫の自力疑心は、かくの如き釋迦諸佛の勸讚を通して始めてうちくだかれるのであつて、そこに善知識の徳が仰がれるので

ある。然も善知識の徳が仰がれること深かければ深いほど、かくの如き善知識に値遇することの難が感ぜられ、そこに宗祖はよき人元祖法然との値遇をいよいよ希有の大事として感激せられたに違いない。元祖との値遇なしには「雜行を棄てて本願に歸する」弘願の信は開けなかつたのである。そして元祖との値遇の上に諸佛の方便、如來の善巧の如何に深いかを今更の如く喜ばれたのである。

「善知識にあふことも、おしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたし」

「眞の知識にあふことは、かたきがなかになをかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき」

等の『和讚』はこうした宗祖の體驗から詠歎せられたものと思われる。

次に師釋四文の中、第一『般舟讚』(五八)の文は、次の『往生禮讚』の文(五)が難信を説き、『法事讚』の二文が善知識の徳を念じて、一は慈恩を明し、二は自ら悲喜を述べるのに對し、それらを總べて誠疑勸信と二尊の慈恩とを明すものである。

『般舟讚』の文はまず始めに勸信誠疑を説くのであつて、「彌陀の攝と不攝とを論ずること莫れ、意専心にして回すると回せざるとに在り」という言葉は、如來の絕對的慈悲の世界を示して「彌陀の本願には老少善惡をえらばれ」ざることを示すと共に、かくの如き絕對的慈悲の世界を觀知する信心の智慧をひたすらに勸めるのである。そして彌陀弘誓の力に依らずば、遂に娑婆を出ることができず、本師釋迦の勸めがなければ、遂に彌陀の淨土に生るることはできない。これ偏えに二尊の慈恩の賜であると、殊に前の『華嚴經』の説を受け、併せて「無念報彼佛恩」故」といふ雜修の失を諷めていられる。この『般舟讚』の意を開いて、『往生禮讚』の文は、殊に『大經』流通の文と照應して、值佛の難、聞法修行の難、獲信の難を歎じ、それ故に教化衆生こそ、まさに報佛恩になることを明すのである。次の『法事讚』の二文は、その初文(下左)にあつて、釋迦發遣の力がなければ、彌陀の名願を聞信することなしとその慈恩を歎ずると共に、「歸去來他鄉不可停」と流轉の世を悲しみ、後の文(下右)では六道輪回の機が、今得難い人身を得、聞き難い淨土を聞き、發し難い信心を發せる喜を述べている。かくてこれらの引文を通して宗祖があらわさんとせら

れたことは、眞門に於ける專修雜心の失を省みて、眞門から弘願に轉入すべきことである。それ故に眞門を結んで、

「眞知專修而雜心者不獲大慶喜心、故宗師云下無念報彼佛恩、雖作行業、心生輕慢、常與名利相應、人我自覆不親近同行善知識、故、樂近雜緣、自障々々他往生正行、故、悲哉垢障凡愚自從無際、已來助正間雜定散心雜故出離無其期、自度流轉輪回超過微塵劫、歸佛願力、入大信海、良可傷嗟、可悲嘆」

と雜心の機失の深さの故に限りなく傷嗟すべく悲嘆すべき悲しみがあると共に、その悲しみの底から限りない大悲の善巧を拜んで、偏えに佛願力に歸すべきことを示されるのである。そして、

「凡大小聖人一切善人、以本願嘉號爲己善根、故不能生信、不了佛智、不能了知建立彼因、故、無入報土也」

とまさに第二十願眞門の過失が不了佛智にあることを結ばれ、その不了佛智の壁を破つて選擇の願海に轉入した喜びが次の三願轉入の文となるのである。まことに不了佛智の過失は既に『大經』に説ける胎化二生の經説を

通して、釋尊が厳しく誡められたところである。蓋し不了佛智は、本願を信じないのではないけれども、佛智に明了でなく、限りなく開かれた願心の世界に歸入しないのであつて、その過失は夙に不見三寶として示され、菩薩の法式を知らぬものと説かれているところである。まことに閉された世界にあるものは、三寶を見聞しつつ、眞實に三寶を見聞することを知らない。そこで忘れられているものは、佛を見るといいつつ、本願成就の佛である如來の願心を忘れ、淨土念佛の法に於いて念佛しつつ念佛を善根として固執して本願の念佛、大悲回向の念佛であることを忘れていゝ。また自ら僧寶であると自負しつつも如何にして人から恭敬される如き僧寶となり得るかを忘れ、ましてや如來の御代官としての僧寶への恭敬が常に忘れられているのではないか。かくの如き不見三寶の過失は、そのままわが身の姿として悲傷せねばならぬのであつて、この悲傷を通して始めて大悲の善巧が仰がれ、果遂の誓良に由ある哉という感激が生れるのである。また菩薩の法式を知らぬということも、菩薩の法式が、罪障懺悔と功德隨喜と請轉法輪であることに於いて、それが罪福信にまつわる雑心の過失を説くものであつて、それが知られるのである。まことに罪障懺悔がないと

いうことは罪福信に基く固執があるからであり、功德隨喜しないのは己が功德のみに固執し、開かれた世界で功德を愛することを知らぬからである。釋尊が阿那律の爲に針の糸を通して、「我功德を愛す」と云われたことは、功德隨喜の世界が如何に固執のない世界であるかを示すものである。更に請轉法輪の心が無いことは、これこそ誠に不了佛智の最も顯著な姿であつて、凡そ明信佛智の世界には完了ということがあつてはならない。それは佛智に明了なることに於いて、愈請轉法輪の心の深きものがあるはずだからである。

かくて微塵劫の久しきを超過して願力に歸し難く、大信海に入り難い專修雜心の深さを如何に宗祖は悲傷せられたであろうか。要門から眞門を開出した眞假批判の嚴しさは、實にかくの如き專修雜心の悲嘆に基くものであつた。また『正像末和讚』に讚詠せられた「疑惑罪過和讚」二十三首は、まさしくこの專修雜心の悲傷から生れたものである。それ故に第二十願眞門にあらわされた專修雜心の過失は、『正像末和讚』の編まれた宗祖八十六歳の晩年に於いて、愈深い悲傷となつたものの如く、しかもその悲傷が「建仁辛酉曆、雜行を棄てて本願に歸す」といわれた從信の喜びを、常に今現在せしめたので

ある。従て三願轉入の自證はかくの如き宗教的自覺の内  
景を示すものであつて、それは歴史的時間の上に規定せ  
られるべきではないであらう。かくて第二十願は常に第  
十八願選擇の願海に轉入せる感激を日々に、念々に新に

する否定契機として働くのであつて、ここに第二十願の  
分位がある。それ故に第二十願の分位は宗祖の宗教的自  
覺を明かにする上に於いて、最も重要な地位を占めるこ  
とを忘れてはならない。